Title	表現的実践を通じた「ケア・支援観」の変遷にまつわるレポート:大阪府堺市 kokoima の現場から
Author	アサダ, ワタル
Citation	関西都市学研究. 2 巻
Issue Date	2018-03-20
ISSN	2432-7239
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	包摂型社会研究会
Description	インクルーシブコミュニティレポート(6)

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

〔インクルーシブコミュニティレポート⑥〕

表現的実践を通じた「ケア・支援観」の変遷にまつわるレポート
——大阪府堺市 kokoima の現場から

アサダ ワタル（大阪市立大学都市研究プラザ）

１　NPO法人kokoimaの概要

NPO 法人 kokoima は、主に日常生活に手助けを必要とする精神障がい者に対して、地域のなかに居場所を提供し、同時に地域社会を精神障がい者にとってより住みやすい場所にしていくための事業を行う法人である。最たる特徴は、代表含め理事の内３名が看護師である点だ。設立の背景には、浅香山病院で行われたある写真展の存在が欠かせない。浅香山病院は大阪府堺市北区にある総合病院で、とりわけ精神科医療体制が充実していることで知られる。ここでは、精神科病棟に長期入院する患者たちが被写体となる写真展が度々開催されてきた。きっかけは、2012 年に写真家の大西暢夫が『精神科看護』という雑誌のグラビア連載の撮影のために同院に訪れたこと。患者個々人と撮影を通じて関係性を築きあげていくなかで、連載では掲載しきれないほど多くの写真が誕生し、患者や看護師からも「写真展をしてもっと多くの方々に観てもらおう」という意見が自然に生まれたという。これが「ココ今ニティー写真展」のはじまりだ。

２　写真展を介した「支援・ケア観」の変化

「ココ今ニティー写真展」の注目すべきポイントは、第一に、患者さんたちが被写体であるに留まらず、展示会場において個々人自らが写真の横に座り、撮影時の思いや半生、そして夢について語り出す、「ナラティブ（語り）」な実践であるという点だ。そして第二に、この展覧会の企画自体に患者さんたちが主体的に関わり、名刺まで制作し「営業」、つまり「地域参加」という点がある。これらを通じて、看護師と患者と写真家という関係性が、この写真展を通じて同じ志 ―写真をもっと多くの人に観てもらいたい、院内に留まらない出会いを求めたい― のもとで「メンバー」として編み直されるのだ。

このような実践を通じて看護師たちは、病院という制度のなかで行ってきた自身たちの「ケア」の在り方について、様々な揺らぎを伴うことになった。院外との個別の関係性が新たに生まれた患者たちの声を聞く中で、写真展を契機にしながら退院と地域生活への移行を果すためのアクションを行うには、「病院発」の試みだけでは限界があることを知ってゆく。そんななか、写真展の中心人物であった当時 看護部長 兼 副院長の小川貞子が自主退職し、写真展に関わったメンバーたちが地域で過ごせるような居場所づくりの事業に着手。法人設立へと繋がる。そして 2015 年 12 月に、浅香山病院から徒歩 10 分程の堺市北区香ヶ丘町の商店街の空き店舗を活用したコミュニティカフェ「ここいま」をオープンした。

３　各々の生きづらさと表現を混ぜ合わせる場へ

「ここいま」オープンから2年（執筆時）経ち、主要な客が写真展のメンバーから、「地域住民」と「メンバー外の精神障害者」へと移行していった。そのなかで、より地域との連携を深めていき、精神障害を一つの軸にしつつも、様々な生きづらさを抱える人たちが居合わせる場づくりという観点を強め、その方向が狭義の「ケア・支援」から「地域づくり・街づくり」的な展開へとつながっている。実際に、近隣の店舗や住民、近隣の関西大学の教員や学生と協働し大きな商店街イベントを今夏開催して盛況を博す。また2017年8月にカフェの向いの空き店舗を活用し、就労継続支援B型・生活介護事業所「おめでたい」を開設。ここでは、写真展などの経験も踏まえ、狭義の「仕事・就労」に収まらない、その人がそのままに居られることをどう仕事へと繋げるか、という視点を大切にし、表現、アートなどの知見を踏まえながら新たな就労事業をスタートさせた。この事業を充実させるためには、様々な表現的実践の経験を持つケア団体との連携が必要だ。そのネットワーク化に際して筆者もアクションリサーチのもと協力し、具体的にどのような就労事業が必要かを議論（月一回、オープン理事会として議論を地域や多分野に開放）し、活動を継続する次第だ。